小特集・『コロナ、優生、貧困格差、そして温暖化現象』から現代的課題について考える

この小特集では現在的な課題に迫る書籍を選び、それをテーマにして、編集同人がそれぞれ自由なスタイルで執筆しています。今号のセレクトは、佐藤幹夫と村瀬学の共著『コロナ、優生、貧困格差、そして温暖化現象』（論創社、二〇二二年）です。

本書では、そのタイトルが示すように現在の社会において重視せざるを得ないいくつかの問題が、著者二名の往復メールで語られています。ひとつの問題を検討しながら、考察が他の問題とも重なり連関していく形で、両名が現代という時代について語り合うという構成です。ひとつの事象は、観察地点（観察者）のまなざし毎に異なった様相を示します。また、その〈まなざし〉は、また別のまなざしによって規定されているのが普通です。言うまでもなく、現代ではこうした多重の〈まなざし〉を自覚することなしに、有効に事象の相貌を浮かび上がらせることは不可能でしょう。そうした多重の〈まなざし〉をこの小特集の取組みが成し得ているかはともなく、少なくともその挑戦たり得ていれば幸いです。

言語とサイクルと想像力と

池上貴子

佐藤幹夫氏と村瀬学氏の対談集『コロナ、優生、貧困格差、そして温暖化現象 「世界史的課題」に挑むための、私たちの小さな試み』の出発点であり中心点は、津久井やまゆり園での障害者殺害事件である。佐藤幹夫氏による植松聖死刑囚の言説の追跡はかなり読みごたえがあった。氏は、「差別的思考」という「ウイルス」が感染して、「思い付きを信念に変化させてい」く植松の内的な変化を丹念に読み取るが、これは優生思想といったメディアの情報に惑わされがちな私たちへの警鐘でもあると感じた。

その佐藤氏の渾身の問題提起を受けとった村瀬氏もまた、戦前の日本や旧左翼運動から連綿と続く「共同体」の幻影に現代人（個人）が取り憑かれる現象を我々に示してくれた。「植松聖が、個人の意志を共同の意志に擬制させようとしていった生き方」を、「大きな視野の中で見えるようにしなくてはいけない」と我々読者に迫るのである。

これに対し、私は対談の内容を踏まえたうえで、当該事件に深く関わる「二つの共同性」について考えることで応答したい。それは「言語」という空虚を本質とした共同性と、「サイクル」という「身体」に積み重なることで成立する共同性だ。

はじめに「言語」についてだが、村瀬氏は、殺人犯である植松聖が恋人に『これだよ、意思疎通をとれるのが人間だよ』と言葉を発し」ており、「意思疎通」の可否が殺人の判断基準となっていた点に着目している。植松が示す「意思疎通」が、「思いを交わす」といった曖昧で柔軟な幅を持つコミュニケーションのことではなく、「意思を交換するツール」としての言語機能に限定されていることは重要だ。第二回公判の記録においても、「話せない人」を確認し襲った様子が報告されており、明らかに「言語」が通じる存在だけを「同じ人間」（共同体構成員）として〈選別〉するという、一元的に硬直化したコミュニケーションが実行されているのだ。

被告が「こいつはしゃべれるのか」と聞いた。「しゃべれません」と答えると、被告は布団をはがして、数回包丁を振り下ろした。（二〇二〇年一月十日、第二回公判）

おぞましいことだが、植松の「自分と同じ『人間』かどうかを判断する材料」は、もっとも空虚な「言語」一択に絞られていた。それは「文学」が取り組むべき領域ではなかろうか。なぜなら、共同体の基盤を同一言語に求める植松聖の思考を拡大していけば、同じイデオロギー＝言語を共有しない人（言語の通じない人）への排除や暴力の構図に合流するからだ。たとえば二〇二二年度に続発したゴッホやモネの絵画にスープ等をかける環境保護団体の抗議活動、あるいは中絶廃止活動でクリニックを爆破する事件、捕鯨船に対する威嚇行為等々。はじめは個人の言葉として発された「正義」が、「全体の意志＝言語」を騙り、自らの言語に固執して、同一化しない者・背く者に暴力を行使しているではないか。村瀬氏もまた同一化志向の言語へと傾く現代社会に危機感を募らせる。

「共産」とか「平等」という観念は、いかにも「万民同